

「魔女」の棲む空間

— “Lois the Witch” と “The Poor Clare”

木村晶子

序

Gaskell の “Lois the Witch” (1859) と “The Poor Clare” (1856) は共に、「魔女」のレッテルを貼られた人物の物語である。“Lois the Witch” は、主人公が魔女に仕立てられてゆく悲劇の中で、人物間の嫉妬や憎悪が、社会不安を背景に集団的狂気へと増幅してゆくメカニズムを解明した、史実 Salem Witch Trials (セイレム魔女裁判) に基く傑作である。この作品には、初期の長編における社会問題や女性問題への深い関心と、後の長編における歴史的事実の検証や精緻な心理劇の全ての特徴が見出せる。一方 “The Poor Clare” は、“My Lady Ludlow” を含む物語集の一編として聖職者の遺した文書にあった昔の話という設定で、1692年のセイレム魔女裁判より半世紀以上後の1747年に語り手が記したとされているが、18世紀初頭に溯って語られるので、両作品は17世紀末から18世紀初めというほぼ同時期を舞台にしているといえよう。

1450年から1750年頃の間、ヨーロッパ中で、五百万人（九百万人との説もある）が魔女狩りの犠牲者となって処刑されたといわれている。¹ 大陸諸国と比べ、英国では、魔女狩りは穏やかな形で行われ、魔女として死刑になったのは五百人以下、原則として火刑ではなく絞首刑によるものだった。² それでも、“The Poor Clare” の Bridget が魔女と噂される舞台であるランカシャーは、英国の魔女裁判史上でも有名な二十人の大魔女裁判 (1613) の地で、“Lancashire Witches” の項目で『魔術・悪魔学百科』にも記載されるほど魔女と縁の深い場所である。³ 1736年に魔女の告発が公的に禁じられた英国において、1700年前後は魔女狩りのピークを過ぎていたにしても、魔女の存在は現代人の想像力を遥かに超えた恐

怖を人々に与えたに違いない。また、地方の民話に関心が高まった十九世紀中頃は、十八世紀より知識人の魔女に関する情報が増えたといわれる。ヨークシャーのある村では、1847年の時点ですら魔女の存在が信じられていたとの記録があるのを見ると⁴、ギaskellの時代における魔女は、知識階級にとっては興味深い非科学的な過去の象徴でありつつ、地方の民衆にとっては現実の脅威であるという多義的な存在だったように思える。

最近では、魔女の研究も歴史学の枠を超えて、階級闘争や支配階層の政治戦略、スケイプゴート説、司法のメカニズムといった経済・社会学的視点、犠牲者としての女性像を探ったフェミニズムの視点等、様々な角度からなされているが⁵、二十世紀前半でも魔女の存在を確信していた聖職者 M.Summers の詳細な魔女学研究がいまだに版を重ねて書店に置かれる英国においては、「魔女」は、想像力の深層で生き続けているのかもしれない。⁶ 本論では、二つの魔女の物語を比較検討しつつ、魔女に焦点をあてることによって浮び上るギaskellの女性像を探ってみたい。

I

共に十九世紀半ばに書かれながら、“Lois the Witch”は、魔女の不在を証明する物語であり、“The Poor Clare”は、魔女の存在を前提として、つまり主人公が魔女としての力を有してこそ成立する物語である。皮肉なことに「魔女ロイス」と名づけられた中編は、全く無実でありながら魔女として処刑される「魔女ではないロイス」の物語であり、表題は魔女とかけ離れたクララ童貞会の修道女を描いた後者の作品が、「魔女ブリジェット」の物語である。史実を検証した「ロイスの物語」と、埋もれた伝説という形の「ブリジェットの物語」は、一見、魔女の存在に対して相反する立場を取っているかのように思える。あるいは、二つの物語における「魔女」は、全く異質の機能をもっているようである。さらに、前者はアメリカのニューイングランド、後者は英国のランカシャーを主な舞台としており、地理的にも隔たっている。

しかし、“The Poor Clare”の語り手の叔父が、魔女の存在を信じ、Sir Mathew Hale という、魔女裁判で死刑宣告をした裁判官の友人だという設定は⁷、二つの

作品の距離を縮める。彼の判決が前例となつて、セイレムの魔女裁判に多大な影響を与えたからである。また、“Lois the Witch”にも、魔女が登場することは見落せない。英国の故郷で、幼いロイスは、池に沈められ石を投げられた「魔女」と噂される老女に呪いの言葉をかけられる。老女は、牧師でありながら彼女を救おうとしなかったロイスの父を恨んで、娘のロイスも、魔女扱いされた時に誰一人助けまいだろうと叫ぶのである。⁸ 老女は、施しを受けながら孤独に猫と暮らす身寄のない貧民で、多くの病人や家畜の病害が出たことで、古来魔女への罰である“Ducking”（水に沈めて浮んだら有罪）を受けたものと解釈できる。この老女は、多くの点で最も典型的な魔女狩りの犠牲者で、魔女の告発を受けた人物の共通項——寡婦または一人暮らしの老女で経済的に困窮し施しを受けている、“familiar”と呼ばれる悪魔の分身と信じられた犬猫等の小動物を飼っている⁹、人に嫌われるような口の悪さや偏った性格、孤独癖がある等の全てに当てはまる。そして、この老女の呪いの言葉通り、ロイスが魔女として処刑されることを思うと、“Lois the Witch”は、表面では魔女裁判の迷妄を暴きつつ、その根底に魔女の予言的中という解釈を許容する二律背反を孕んだテキストと考えられる。¹⁰

では、魔女の迷信を暴いたテキストの表の面、セイレム魔女裁判を描いた部分は、どの程度まで史実に忠実なのだろうか。J.Uglowによれば、ギヤスケルは魔女狩りに強い興味を抱いており、彼女の属したユニタリアン派の聖職者や、当時の有名な進歩的思想の持主 H.Martineau のセイレム魔女裁判を分析した資料をもとにこの作品を構想したという。¹¹ 実際、“Lois the Witch”に描かれる魔女騒動の発端は、かなり事実に近い。年号はもちろん同じであり、牧師 Samuel Parris の九歳の娘 Betty と十一歳の従姉 Abigail が悪魔に憑かれたような状態になって、パリス家の黒人奴隷 Tituba を魔女として告発した現実の出来事は、作中では、同じく牧師の Tappan 家の二人の娘 Abigail と Hester が悪魔に憑かれて、インディアンの召使 Hota を魔女としたことになっている。¹² 固有名詞や召使の人種こそ違え、少女達のヒステリー状態が大きな悲劇の始まりとなったことは史実通りである。また、処刑された魔女の中に聖職者が含まれていたことも事実で、Faith の片思いの相手 Nolan 牧師が処刑されるのも不自然ではない。

しかし、発端の事件を除くと、作品の出来事はかなり史実とは離れたものであ

る。まず、主人公ロイスに相当する処刑者は、記録には見当たらない。ロイスは、魔女扱いされた女性達の特徴を持たず、年齢的にも、むしろ魔女を告発した側の少女達に近い。現実には、先の二人の少女以外に十二歳から二十歳までの十人近くの若い女性が共謀したかのように次々と発作をおこしては魔女を告発していった。彼女達の集団ヒステリーともいえる状態には様々な解釈（悪質ないたずらとの説から、思春期の不安定な精神・身体状態、家庭の虐待経験説等）があるが、初期に彼女達が魔女として告発したのは、ロイスとは何の共通点もない社会のスケープゴートの存在——黒人奴隷ティテュバ、乞食の女、私生児の母親、三度結婚経験のある足の不自由な女だった。また、実在のティテュバは、魔女であることを自白したため処刑されず、作中でホウタが真先に処刑されるのとも違っている。人格的に問題が無かったのに魔女扱いされ、最後まで魔女であることを自白せず処刑された、敬虔な実在の人物としては、Rebecca Nurseがいるが、彼女は中年過ぎの良き妻、強き母であり、ロイスのモデルとは思えない。

とすれば、“Lois the Witch” は、当時のセイレムの独特の社会不安やピューリタンの共同体の雰囲気をとらえ、Cotton Mather の言葉や、作品末の、1696年に出された魔女裁判の過ちを認めた宣言文（全文ほぼ原文通りであり陪審長の名も実名）も再現しているとはいえ、魔女裁判のドキュメントではなく、あくまでも魔女裁判を題材にした「小説」であろう。¹³ 作品の中心は、魔女をつくりだす共同体のメカニズムにあるのではなく、ロイス個人が魔女扱いされる家庭内の心理劇にあるのである。この点で、“Lois the Witch” は、魔女の呪いが、思いがけず自らの孫娘を苦しめることになった悲劇“The Poor Clare”と同じく、女性達の親子愛、異性愛を核にした心理的葛藤を描いていると言える。どちらの作品においても、魔女は、その心理ドラマの中心になるヒロイン像に重ね合せられる象徴的意味を担うものとして存在する。以下、まず親子愛、特に母と子の愛情に焦点を絞って二つの作品を考察してみたい。

II

“Lois the Witch” で最も印象的なのは、処刑される直前のロイスが、「お母さん！」と最後に一言叫ぶ場面であろう。

She gazed wildly around, stretched out her arms as if to some person in the distance, who was yet visible to her, and cried out once, with a voice that thrilled through all who heard it, 'Mother!' Directly afterwards, the body of Lois the Witch swung in the air and every one stood with hushed breath, with a sudden wonder, like a fear of deadly crime, fallen upon them.¹⁴

死の直前にロイスが見たものは、亡き母の幻影だったのだろうか。作品の冒頭部分で夫の後を追って病死してしまうロイスの母は、海を渡ってセイレムに移住した弟、つまりロイスの叔父のもとへ行くように遺言して手紙をのこす。他に身寄が無いとはいえ、悲劇の地へとロイスを旅立たせたのは母であった。その母の叔父への手紙が、配達の少年の怠慢さからロイスの到着前に叔父のもとに届かなかったため、ロイスは誰からも歓迎されずに叔父の家での生活を始めることになってしまう。この作品では、ロイスの母は初めから不在の存在としてロイスの孤独の原点となるが、母の手紙が届かないことにも、母の喪失は象徴的に表れている。ロイスが、母の愛を失った娘であり、その母も彼女を残す悲しみに心を痛めながらも「ロイスの淋しさより、亡き夫とじきに一緒になれる喜びを考えていた」¹⁵ことは、ギャスケル作品に度々描かれる母の愛の喪失や母の不在のモチーフを改めて考えさせる。母の死から始まって、母のもとへ旅立つかのような死で終るロイスの物語は、母の喪失によって、最終的な拠り所と保護してくれる存在を失った者の悲劇となる。

では、“Lois the Witch” に登場するもう一人の母親、ロイスの叔母の Grace は、どのような母なのだろうか。ロイスに対しては全く母親代りの愛を注がなかったことは明らかだが、実の娘達フェイスと Prudence に対してはどうだったのだろうか。作品で描かれているのは、息子に対する盲愛ばかりで、グレイスは、フェイスの内面の苦しみも理解せず、プルーデンスの病的な程の情緒の欠如にも気づこうとしない。獄中のロイスに会いに来るグレイスは、ロイスへの同情心はかけられもなく、ひたすら息子の Manasseh を魔術から救うように懇願するだけである。息子の母親ではあっても、娘の母親としては全く母性を欠いているのがグレイスなのである。魔女と告発されるロイスにおいて、母の愛を喪失した娘の悲劇が描

かれるとすれば、告発する側のフェイスとブルーデンスにおいては、母の愛を喪失した娘の病理と過ちが描かれている。魔女と告発する側もされる側も、同じく母の健全な愛から隔てられた娘達なのである。

それでは、“The Poor Clare”における母と娘の関係はどうだろうか。ブリジェットに視点を置けば、不在なのは母親ではなく娘である。夫に先立たれ、昔の奉公先に戻って働くブリジェットは、最愛の一人娘 Mary が、英国を離れて働きに出ることになって捨てられたような淋しさを感じ、娘の出発後は、ショックのあまり閉じこもってしまう。娘の便りが途絶え、消息不明になると娘を探す旅に出るが、娘の行方はつかめぬまま歳月が過ぎる。娘が可愛がった犬を我が子のように大切に暮しているが、その犬を屋敷の滞在客の男が腹立ち紛れに射殺してしまったことから、この男に呪いをかける。ところが、この男こそ、娘のメアリと恋におち、子供を身ごもらせたにもかかわらず、その不実さゆえにメア리를自殺に追い込んだ当の相手であり、ブリジェットは、知らずに娘の死の復讐の呪いをかけたことになる。「汝の最愛の者が誰からも忌み嫌われるように」という呪いは、期せずしてメアリの忘れ形見である孫娘に降りかかってしまうのである。

このようにまとめてみると、ブリジェットが魔女となる原点には、不在の娘への愛があることがわかる。犬の死で復讐心に燃えたのも、犬が最愛の娘の身代りだからであり、呪いが成就してしまう背景には娘自身のための復讐が隠されていた。“Lois the Witch”を、母を喪失して魔女と誤解される娘の物語と解釈すれば、こちらは娘を喪失して本当に魔女となってしまう母の物語となる。

では、ブリジェットの人物像と魔女とは、どのように重なり合っているだろうか。まず、大陸から英国の領地に戻った地主夫妻と共に到着するブリジェットは、アイルランド出身の「堂々とした足取りの中年過ぎの女」¹⁶で、使用人でありながら夫妻に強い影響力をもつ「密かな権力者」¹⁷であり、英国においては異端のカトリック信者で、召使に恐れられる程の強い性格の持主である。娘を探しに外国に一人出かけた後も、「きつい性格と怒った時の激しさ」¹⁸を恐れて、村人は彼女の留守宅に入ろうとしない。

しかし、彼女が真に魔女に近づくのは、この旅から戻った時からである。いうまでもなく、娘の消息不明が、この世ならぬ苦しみを与えたのである。目つきでようやくブリジェットとわかる程、彼女は「まるで地獄の業火で焼かれたように

色は黒く、怯えた獐猛な人間」¹⁹ に変わっていた。この後、悪魔と会話するかのよう
に絶えず独り言をいっては自問自答し、「要するに、知らず知らず、魔女とい
う恐ろしい噂を立てられてしまう」。²⁰ また、「彼女と目が合った者は、二度と彼
女を見ようとはしなくなり」²¹、Gisborne が犬を撃ち殺した時には、彼女は、
「暗い恐ろしい目つき」²² で彼を凝視して呪いをかける。後に語り手が訪れた時
も、彼女の探るような視線は、語り手の心を読む力をもつ。彼女のまなざしが再
三強調されるのは“evil eye”（凶眼）と呼ばれた、災いをもたらす魔力をもつ
視線を示唆しているだろう。

異端の信仰、野蛮で恐ろしい容貌、激しい気性、悪魔との同居を暗示する独り
言や凶眼に加え、犬を子供のように可愛がってペットにしていたことは（ロイス
に呪いの言葉を吐いた老女が猫と暮していたように）、悪魔の分身である小動物
“familiar” の存在として、ブリュットに魔女の特徴とされた多くの属性を与
える。²³ ただ、それらの原点に唯一人の娘に去られた悲しみと娘を失った悲痛さ
があることは、仲違いしたまま旅立たせた悔い、早く戻ってほしいために旅立ち
の不幸を願ってしまった自責の念からも窺える。

... She never knew how I loved her; and we parted unfriends; and I fear
me that I wished her voyage might not turn out well, only meaning –
Oh, blessed Virgin! you know I only meant that she should come home
to her mother's arms as to the happiest place on earth; but my wishes
are terrible – their power goes beyond my thought – and there is no hope
for me, if my words brought Mary harm.²⁴

しかし、視点を孫娘の Lucy に移せば“The Poor Clare” は、母を喪失した娘
の物語となる。物心つく前に母を亡くした Lucy は、死の原因となった父の過ち
で祖母の呪いを受ける訳だが、「父親の罪が、子供達に戻ってくる」いわゆる
「親の因果が子に報い」の表現が二度も見出せる。²⁵ 父親の行いの結果が娘を不
幸に陥れる点では、“Lois the Witch” と重なり合うのである。つまり、ロイス
の処刑を、幼児期の魔女の呪いの成就とした場合、老女を救おうとしなかった父
親の行為を、娘のロイスが魔女としての死によって贖ったとも解釈できる。（因

みに、ロイスがアメリカに渡った船は“Redemption”（贖い）だった。）

故郷の魔女の思い出を挿入することによって、“Lois the Witch”は、魔女の實在という解釈の余地を残すテキストとなり、史実を再現しつつも、魔女によって全てが予言されていたかのような、超自然的な力をテキストの余白に呼び起こしてしまう。“The Poor Clare”でも、ブリジェットが魔女であることは、初めは村人達の噂にとどまり、告発されることもないが、ルーシーに呪いがふりかかることで、ブリジェットの超自然的な力は確定される。ロイスは犠牲者で、ブリジェットは加害者の立場とはいえ、魔女という超現実的な行為者は、母と娘、父と娘の縦の関係の中で複雑な愛憎劇を引起こす象徴的存在となるのである。

だが、“The Poor Clare”という作品の興味深さは、ブリジェットが魔女として処刑されるのではなく、修道女となって悔い改める点にある。娘を溺愛するあまり、娘の死を招いた男に呪いをかける結果になったとすれば、娘の代りに最愛の孫娘を救うために、ブリジェットは自らの内にある魔女を抹殺せねばならなかった。とすれば魔女とは、激しい愛の裏に必然的に生まれる憎しみの表象だろうか。

また、“Lois the Witch”において、ロイスに呪いをかけた老女の迫害される姿は、後に集団的な恐怖から生まれた残酷さの犠牲者となるロイスを予兆する。魔女は、平穏な日常の下に埋もれた原初的な恐怖を明るみに出し、魔女狩りの過程で、嫉妬や憎しみがあらわになる。以下、魔女を通して表れる心の闇の部分に注目してみたい。

III

“Lois the Witch”は、孤児である主人公が、叔父に引取られるものの、叔父の死後、血のつながらない叔母とひとりの従兄弟、二人の従姉妹達に冷遇、虐待される点でC.Brontëの*Jane Eyre*に似ている。従兄弟マナセに神の意志を強調した求婚をされる点もSt.Johnの求婚を思い出させる。しかし、*Jane Eyre*が自らの意志と勤勉さによって居所を変えては幸福をつかんでゆくのと反対に、ロイスは、叔母の家という閉鎖空間で、嫉妬や悪意を向けられて投獄され処刑される。先に述べたように、現実に魔女と告発された人物達とは違う、汚れなき乙女としてロイスを描くことによって、魔女狩りの迷妄と悲劇性が強調されているのは間

違わない。作中のロイスの怒りの表現は、ロイスの母の死を悼む叔父に対して冷淡な叔母に怒りの目を向けることだけで、ジェイン・エアが見せた、叔母や従兄弟に対する激しい怒りや反抗は見出せない。ロイスは、あくまでも罪無き犠牲者としてのヒロインなのである。

叔母の一家の各々の名、Grace、Faith、Prudenceは皮肉にも彼女達に欠けている美德であり、信心深いつもりでいながら慈愛とは無縁の叔母、恋の盲目ゆえに信仰心を忘れて嫉妬と疑いにとらわれる長女、思慮分別の全く無い次女が、揃ってロイスを死へと追いやることになる。また、長男マナセだけは、ロイスを弁護するが、彼女が魔女でないという訳ではなく、魔女となることが神に予め定められていた以上、罰するのは無駄だという論理だった。彼の妄想は、狂気じみたものとなり、母親のグレイスも、公けに息子の狂気を認めざるを得ないが、それを魔女ロイスの仕業とすることで一家の名誉を守ろうとする。

ここで注目したいのは、魔女の告発が、セイレムの社会不安や共同体の特殊性以上に、歪んだ異性愛の結果として描かれる点である。本来、魔女の告発は、恋愛関係とは関らず、子供や家畜の病い等の説明のつかない不幸の元凶として共同体の底辺のスケイプゴート的人物に対して向けられた。悪魔に憑かれた発作によって、初めの告発者の娘のように注目を浴びたいというブルーデンスの気持は、史実に近いが、それを支持する姉フェイスのロイスへの嫉妬心は、作者の虚構だろう。密かにノラン牧師を熱愛するフェイスは、彼の気持がロイスへと傾いて行くことに激しく嫉妬する。ブルーデンスがロイスを魔女として恐れ始めるのも、フェイスの言葉が引金だった。

“Take care, another time, how you meddle with a witch’s things,” said Faith, as one scarcely believing her own words, but at enmity with all the world in her bitter jealousy of heart. Prudence rubbed her arm, and looked stealthily at Lois.

“Witch Lois! Witch Lois!” said she at last with a childish face of spite at her.²⁶

つまり、魔女ロイスの誕生は、多分にフェイスの嫉妬心によるもので、それに

ブルーデンスの悪質な自己顕示欲と母グレイスの息子への盲愛と虚栄心が加わった結果、ロイスには逃げ道がなくなってしまうのである。本来排他的な異性愛は、我が子だけに執着する母の愛同様、盲目的で理性を否定した危険なものとなる。魔女は、ギャスケルの作品においては、そうした妄執の犠牲者の象徴となる。

興味深いのは、二つ作品のどちらにおいても、男性の愛情は女性を救う力をもたないことである。ロイスの死体に口づけして行方不明になってしまうマナセの狂気は、ロイスを追いつめた遠因であるし²⁷ ノランは魔女として処刑されてしまう。²⁸ 故郷の婚約者が助けに来るはずだという獄中のロイスの希望も虚しく、彼は死刑執行後にセイレムに到着する。“The Poor Clare”でも、ルーシーの呪いを解こうとしても、彼女を愛する語り手は無力であり、ブリジェット本人の改心こそが呪いを解く。語り手は、魔女に魅入られたようにルーシーを救おうとするが度々病に伏せてしまうのである。

では、ルーシーの呪いとは、どんなものだったのか。「最愛の者が誰からも忌み嫌われるようになる」という父にかけられた呪いは、ルーシーに生写しのもう一人のルーシー、即ちダブルが出現し、“evil doings”（悪しき行い）を為すことで成就する。ルーシーのダブルの行いは、父の怒りをかけて、娘への愛情を奪うだけでなく、愛を憎しみに変えてしまう。ルーシーの意志とは全く無関係に出現するダブルは、瓜二つでありながらも「悪魔の魂がまなざしにあらわれている」。²⁹

ダブルの悪行が、邪悪というよりむしろ淫乱である点は、注目に値する。父が目撃した、花を台無しにする花壇での踊り、厩番との親しさに始まって、後に語り手が聞く「響きはよいのにひどく心を苛立たせる」³⁰ 笑い声は全て、他者に害を与える行為ではなく良家の子女には許されない下品さを示している。淑女が従うべき性道徳の規範を侵すことが、“evil doings”なのである。初めて語り手がダブルを目撃する場面は、興味深い。

Just at that instant, standing as I was opposite to her in the full and perfect moonlight, I saw behind her another figure — a ghastly resemblance, complete in likeness, so far as form and feature and minutest touch of dress could go, but with a loathsome demon soul looking out of the grey eyes, that were in turns *mocking and voluptuous*. (イタリック筆者)³¹

語り手が「官能的」な悪魔の魂をもったダブルに恐怖と嫌悪を感じつつ「魅了され」³² 思わずダブルに触れようと手を伸ばすこの場面には、ダブルの性的な本質が表れている。ルーシー自身が、ダブルと正反対の純粹で貞淑な乙女であることを思うと、ダブルは、淑女ルーシーには禁じられた、あるいは初めからもつことすら放棄した欲望の具現ではないだろうか。³³ また、語り手は、ルーシーの貞淑さを愛し、邪悪なダブルによって二人の愛が壊れることを恐れるが、彼女のあまりのおとなしさと忍耐強さに苛立ちもする。そこには、語り手自身の内に抑圧された奔放な性愛への欲望も読取れはしないか。ルーシーを救おうとしながら、語り手がしばしば病に伏せるのも、彼自身の内なる闇の存在を思わせる。このようなダブルの出現は、魔法の行いの記録にはあまり見当たらないが、魔法が呼び起こす悪魔的な衝動は、“Lois the Witch”における魔法を生み出す嫉妬や憎悪同様、理性の統御の及ばない精神の暗部を浮び上がらせる。最後に、主人公の救済を考えながら、魔法の存在の意味の深さをまとめてみたい。

IV

どちらの作品においても、ヒロインと魔法の犠牲者を救済するのは、男性の愛の力ではなく、彼女達自身の愛と献身である。ロイスは、獄中で同じく魔法として告発されたインディアンの召使 Nattee と再会して、正気を取戻す。ロイス以上に怯えるナティを我が子のように慰めることで、「神はロイスに慰めと力を与えた」³⁴ のである。母を失ったロイスは、死を前にした最も悲惨な境遇で、母のような慈愛で他者を癒すことによって、自己の母性を獲得する。他者への献身的な思いこそが、自分の救いに通じるのである。

ブリジェットの場合は、彼女自身が最も厳しい戒律を守る修道女 Sister Magdalen として生れ変って、弱者のために身を捧げることが救済への道となる。ブリジェットの名と存在を捨てることは、象徴的な魔法殺しだろう。Magdalen の名は、マグダラのマリヤを思わせ、性道德の逸脱の罪の点で、改めて魔法の官能性、抑圧された女性の性を暗示する。マリアといえば、ブリジェットの娘の名がマリアだったのも興味深い。マリアは、母同様気性が激しく「母娘はあまりに似過ぎていた」³⁵ ため喧嘩も絶えなかったが、美貌に恵まれて身分の上の男と結

ばれ、娘を一人もうけるという運命も似ている。衝動的に恋に身を任せた性急さは、母の激しい情念を投影している。

ブリジェットは、娘が旅立って以来、度々聖母マリアの絵に祈りを捧げていたが、憎しみの言葉は天へ届かず、悪魔との契約の呪いになってしまった。しかし、自らが慈愛の母となって呪いの相手ギズボーンを命をかけて看病することでブリジェット自身も救われ、ルーシーの呪いも解けるのである。ブリジェットにおいては、娘への強い愛から生まれた妄執が、聖母のような愛の代りに魔女の呪いを生み、憎しみを完全に消して呪いを解くためには、聖母に近づく苦行が必要だった。

“The Poor Clare”の結末でブリジェットが到達するキリスト教的愛の境地と救済の尊さはいうまでもないが、修道女の命をかけた献身以上に、彼女が抹殺せねばならなかった魔女は、抑圧された情念や欲望と愛の複雑さの悲劇を訴える力をもっている。聖母マリアと魔女は、一見正反対の善と悪、良き母と悪しき老婆を表すように思えるが、女性の愛においては両者が複雑に絡み合い、精神の光と闇をつくり出すのではないだろうか。ヴィクトリア朝の性道徳が、女性を家庭の天使と性的に墮落した女に二分したのと同様に、聖母と魔女に分断された女性像は、表面的なものに過ぎない。

近年の女性研究者の魔女研究においては、古来、病を癒す力をもっていた女性達が、近代的医術の発達過程において魔女扱いされて抹殺されたと論じられたり³⁶、魔女の告発原因の多くが、収穫物や家畜の病害等の食にまつわるトラブルや子供の病といった、家事と育児にまつわる恐怖と結び付くとして、母性と魔女の深い関係が論じられている。³⁷

また、魔女は、悪魔と契りを交した情婦で、その分身に乳を与える母でもあることから、西欧文化圏における女性の肉体観を表すとする議論も盛んである。本来、母体は、豊穡と安らぎの象徴である一方で、分離したはずの子供の肉体を再び呑み込みかねない、恐怖をも呼び起こす。魔女は、そのような原初的恐怖を具現した肉体として、空を飛び、魂が遊離し（セイレムで、本人ではなく悪魔に魂を売った spirit が悪事をしたと主張されたように）不潔で液体がしみ出す気味悪い存在として規定される。魔女は、個を個たらしめる肉体と精神の明らかな境界を侵し、流動的で非定型の肉体として、自我の土台を揺るがす恐怖の源となるので

ある。³⁸

このような観点からは、“The Poor Clare”のルーシーのダブルの呪いも、より深い形而上的意味をもつし、“Lois the Witch”のセイレムの社会不安の根底にも、より集合的無意識に近い原初的恐怖があったと言えるだろう。二つの作品における魔女は、悪の権化ではなく、親子愛や異性愛を軸として、抑圧された欲望や根源的不安を呼び起こす存在として人の弱さや悲しさを浮彫りにし、改めて女性像の深層を照らし出すのである。

註

1. 魔女狩りの死者については文献によって大きく異なる。この数字は James Sharpe, *Instruments of Darkness: Witchcraft in England 1550-1750* (1997; London: Penguin) による。
2. James Sharpe, 前掲書。
3. Rossell Hope Robbins, *The Encyclopedia of Witchcraft and Demonology* (1959; Middlesex: Hamlyn House) pp.296-8.
4. James Sharpe, 前掲書によれば John C. Atkinson 牧師の記録。
5. 社会学的視点のものとして有名なのは、Christina Lerner, *Witchcraft and Religion* (1984; Oxford: Basil Blackwell) であろう。その他、最も最近のものとして John Barry, Marianne Hester & Gareth Roberts ed. *Witchcraft in Early Modern Europe* (1996; Cambridge: Cambridge UP), Vanetia Newall ed., *The Witch in History* (1996; New York: Barnes & Noble Books) 等を参考にしたが、フェミニズム的視点のものについては後述する。
6. Montague Summers, *The History of Witchcraft and Demonology* (1925; New York: Dorset Press: 1987), *A Popular History of Witchcraft* (1936; New York: Causeway Books: 1973)
7. Sir Mathew Hale の魔女裁判での役割については Gilbert Geis & Ivan Bunn, *A Trial of Witches: A Seventeenth-Century Witchcraft Prosecution* (1997; London: Routledge) に詳しい。
8. Elizabeth C. Gaskell “Lois the Witch” (1859; London & New York: Knutsford Edition vol.7: 1972) p.122. 以下引用は全てこの版による。
9. “familiar” は、英国のみの魔女の特性とされている。
10. Felicia Bonaparte, *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon* (1992; Charlottesville & London: UP of Virginia) p.112. には

この矛盾に関する言及がある。

11. Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories* (1993: New York: Farrar Straus Giroux) p.475. の他、John Geoffrey Sharps, *Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works* (1970; Sussex: Linden Press) pp.315-324 にも、資料や史実についての言及がある。
12. セイレム魔女裁判に関しては、主に Peter Charles Hoffer, *The Salem Witchcraft Trials: A Legal History* (1997; Kansas: the UP of Kansas) を参考にした。
13. 宣言文と異なるのは、原文 fear が feel (p.207, 1.6) になっているのみである。
14. "Lois the Witch" p.205.
15. *Ibid.* p.112.
16. Elizabeth C.Gaskell "The Poor Clare" (1856; New York: Knutsford Edition vol.5: 1972) p.332. 以下引用は全てこの版による。
17. *Ibid.* p.334.
18. *Ibid.* p.338.
19. *Ibid.* p.338.
20. *Ibid.* p.339.
21. *Ibid.* p.339.
22. 340.
23. ただし、familiar 自体が魔力をもつのが普通なので、殺されてしまうこの場合は、例外的かもしれない。
24. "Lois the Witch" pp.348-9.
25. "The Poor Clare" p.363, p.367.
26. "Lois the Witch" p.181.
27. マナセの狂気はまた、*Jane Eyre* との関連性を思わせる。
28. Witch は悪魔と契約した者を表し、圧倒的に女性だったが、男性で魔女裁判にかけられた者も多くいる。
29. "The Poor Clare" p.374.
30. *Ibid.* p.358.
31. *Ibid.* p.362.
32. *Ibid.* p.362.
33. John G.Sharps は前掲書で、ルーシーがあまりにヴィクトリアン・ヒロイン的で、唯一人物造型に不満が残るとしている。
34. "Lois the Witch" p.204.
35. "The Poor Clare" p.334.

36. Barbara Ehrenreich & Deidre English, *Witches, Midwives and Nurses: Complaints and Disorders* (1973; New York: The Feminist Press) James Sharpe によると史実とは異なる。
37. Diane Purkiss, *The Witch in History: Early Modern and Twentieth-Century Representations* (1996; London: Routledge)
38. Hélène Cixous. Luce Irigaray らフランスのフェミニズム思想家は、特にこの点を取上げている。また、Marianne Hester, *Lewd Women & Wicked Witches: A Study of the Dynamics of Male Domination* (1992; London: Routledge) にも指摘がある。
- ※. なお、Lois は発音上はロウイスと表記すべきだが、慣例に従って本文中ではロイスとした。